



the skyline

Text_Taniyama Takeshi Photo_Hidaka Masatsugu Coordination_Sato Reiko

心地いい“線”

英国の中西部に位置し、「英国の宝石」とも称されるコッツウォルズ地方。なだらかな丘陵地帯の狭間に美しい村が点在する、英国屈指のカントリーサイドである。今回、同地方のバース・マーシュフィールドという町に建てられた、建築家ピアス・テラーさんの自邸を訪れた。



テラスで午後のひとときを楽しむご家族。建築家(父)のPiers Taylor (ピアス・テラー)さん、母のSue (スー)さん、娘のLily (リリー)ちゃん、長男のArchie (アーチャー)くん、次男のFerdinand (フェルディナンド)くん。



キッチンでティータイムの準備をしているピアスさん。ブルーを基調としたキッチンは、ソファのブルーとの相性もいい。ピアスさんはシドニー工科大学を卒業後、ロンドンのアーキテクチュラル・アソシエーション・スクール・オブ・アーキテクチャで学び、現在では「インビジブル・スタジオ」の代表を務める。建築家として活躍する傍ら、バース大学やケンブリッジ大学などでも指導。



左_トランポリンで遊ぶアーチャーくん。右_1歳のフェルディナンドくんの面倒をみる、姉のリリーちゃん。自然に恵まれた環境のなかで、子どもたちはとても気持ちよさそうに遊んでいた。

緑の布が丘一面をあますところなく覆っていた。1枚の布きれでは足りないのだろう。つぎはぎをしている。連なる樹木はまるで、それぞれの布を繋ぐステッチだ。

丘の頂は水平線のように、横長に伸びていた。その線の色もやはり緑。微妙な揺らぎのある、手書きの線だ。つまりこれが、この土地のスカイラインである。

「ここから全部は見えませんが、5つの丘があります。それらの丘が5本の指のごとく、バースの街に向かって伸びています」と、建築家であり、この家の主であるピアス・テラーさんが説明してくれた。

大自然でも絶景でもない。草と木が、単に緑のグラデーションをつくっているだけの世界ともいえる。ただし、太陽が雲から出たり入ったりするたび、その緑にさらなる陰翳がつき、また別の表情を見せるのだ。

目を凝らすと、家々が点在している。肌色をしたライムストーンの外壁の家が、緑の丘に染み込むように建っていた。

赤いレンガの屋根をもつ家ですら、緑に赤い点が少しだけ滲んだようにしか映らない。背景の自然と、家との境界線が、曖昧だ。

英国人は水彩画を好むと聞いたことがある。風景画、そして水彩画の巨匠、ターナーの名を出すのも気が引けるけれど、この景色を前にすれば、誰だって水彩絵の具を取り出したくなる。

ちなみに「バース」とは、ロンドンから西へ140kmほどのところにある街で、ローマ時代、温泉の名所として栄えた。現在、その市街地は世界遺産に指定されている。

男の夢、女のリアル

2002年、ピアスさんは、出産のため入院していた妻のスーさんに手紙を書いた。それは「ここを買わなければ、ここに住めなければ、僕の夢は一生破れたままになる」という内容だった。もちろん「ここ」とは、今回紹介している家のことだ。

ピアスさんはこの物件を地元の不動産広告で知り、すぐさま連絡をとって、内見に行ったそうだ。実は敷地の門をくぐった瞬間、案内してくれた不動産屋に購入の意向を伝えたという。

奥さんのスーさんにしてみれば、夫の熱い思いは理解できるものの、ふたつ返事で答えられる案件ではない。

誰だってそうだろう。

いい靴やスポーツカーといったいわゆる男の物欲ならいざしらず、相手は家だ。しかも何人もの所有者の手を経てのち、しばらく買い手がつ

かなかったため、メンテナンスが行き届かず、老朽化が著しい物件とあらば、なおさらだろう。

この建物のもともとも1786年に猟場の番人が寝泊まりするためにつくられたもので、現在「グレードⅡ」という保護指定を受けている。「グレードⅡ」というのは、ありがたくもあり、やっかいな代物でもある。しかるべき機関に認定されたということは、建物の歴史的価値が保証されていることを意味する。そして、多くの英国人がそうした“由緒”を心から愛している。

その一方で、「グレードⅡ」は改築や補修に際し、厳しい基準や規定がある。言葉は悪いが、ちょっと手のかかる物件なのだ。

「増改築を行うために、地元の職人さんの手を借りましたが、当時は家のそばまでクルマをつけることができなくて、資材を全部、人力で運ばなくてははいけなかったんですよ」

と、ピアスさんは語った。要するに、かなり個性的な立地だったというわけだ。

その土地や建物にどれほど夫のロマンがあろうとも、リアルに生活をやりくりする妻がためらうのも当然だ。

古今東西、家探しは公式で解けない難問である。決断ひとつで人生が変わる。どのタイミングで、何を選べばいいかは、本当に悩ましい。

ピアスさんは建築家としての知識と経験で、ずっと思い描いていた“家族の暮らし”を、“この家なら実現できる”という勘が働いたのだろう。スーさんは「2週間考える時間がほしい」と夫に伝えた――。

現在では、家族みんなが古い石壁の前で、ティータイムの時間を楽しんでいる。

取材中、デッキの階段に母と娘が座って談笑していたり、1歳の末っ子が三輪車に乗って遊んだりしていた。長男はカメラを向けると、“僕は別にいいよ”みたいな様子だったけれど、気がつくやうに家の脇にあるトランポリンの上で、取り囲む木と高さくらべをするかのように、元気に飛び跳ねていた。カメラを向けると、どンドン高く飛んでくれた。

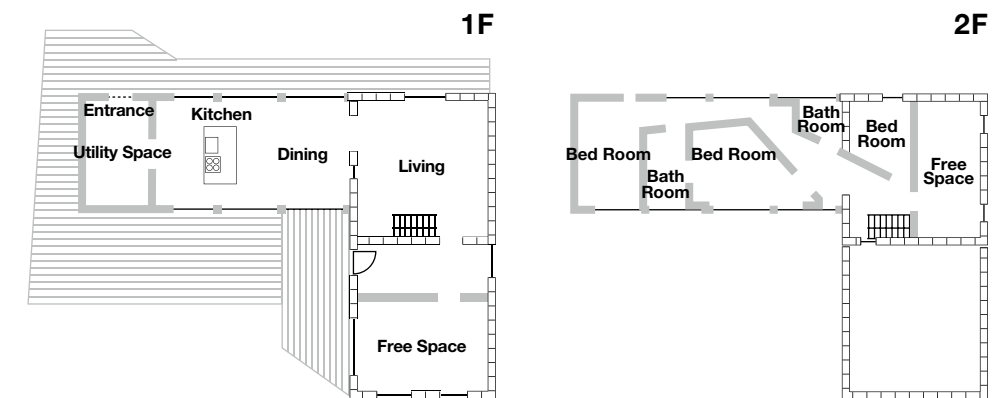
過去との、土地との、風景とのつながり

テラスからは英国のカントリーサイドらしい、美しい光景を望むことができる。そして、18世紀の狩猟小屋の面影を今日に残す建物が、その景観に寄り添うように存在している。

今から約20年前、チャールズ皇太子は「英国の未来像」(出口保夫訳／



左上_子ども部屋の机は長い板をわたしてつくったもの。子どもたちが大きくなったら並んで勉強するのだろう。右上_風光明媚なコッツウォルズ地方の景色を独り占めできるバスルームだ。左下_裏手は寝室や浴室がある2階部分のプライバシーを守るため、木材をつかったスリット状の目隠しがなされている。右下_メインのベッドルームからも、もちろんすばらしい眺望が。



東京書籍)という一冊の本を上梓した。

英国の現代建築を痛烈に批判した内容で、当時かなりの物議を醸した。それは、日に日に失われていく英国の田園風景や市街地の伝統ある景観を惜しんでのことだ。

チャールズ皇太子は「はじめに」のなかで、「過去との接触を失う時、人はその魂を見失う」と述べた。

そして、皇太子は英国の未来のために「10の原則」を打ち立て、具体的に自らの考えを示した。その原則は「場所」という項目からはじまり、冒頭には次の一文がある。

われわれは土地を尊重しなければならない。それはわれわれの生得権であり、そこには寸分の隙間もなくこの島の歴史が厚く積み重ねられている。

風景はすべての建築の背景を成している。

ピアスさんはオーストラリアの建築家グレン・マーカット氏のもとで建築を学んだ。グレン・マーカット氏は国内外で数多くの賞を受賞する、現代を代表する世界的な建築家のひとりである。氏は『グレン・マーカット：シンキング・ドローイング／ワーキング・ドローイング』（TOTO出版）のなかでこう述べている。

建築の本質的な主題は、人間であり、その歴史と文化である。空間、光、素材をどうつなげて建てるか。土地への責任。良いデザインとは、これらを理解してその答えを見つけるまで模索を続けることである。建築とは、見出す過程そのものである。

ピアスさんはグレン・マーカット氏のもとで“日本建築のもつ軽量性”を学び、また氏の“素材そのものを生かすスタイル”から大きな影響を受けたという。そしてそこから得た考えやインスピレーションを、具体的にこの家の増築にとり入れた。

「増築部分は複雑な構造をもたせず、シンプルにすることで、家自体の軽さはもちろん、見た目の軽やかさも大切にしました。また、地面に接触する基礎を最小限にすることで、水はけがよくなり、周囲の自然への影響を軽減できたと思います」と、ピアスさんは語った。

駐車場からこの家にアプローチするには、小径を少し下ることになる。「1階にガラスを多く使用することで、視覚的に外と中の境界をなくしました。外から家に帰ってくるとき、手前の木立から、家や、その向こ

うにある丘や谷が見わたせるようになっているんです」

外壁の一部には、波形状の黒い金属板が使われている。「波形状の金属板は、近所の農家の納屋を参考にしました。この土地の風景とつながりをもたせたかったからです」

家の中に入ると、まず北にも南にも開放された、とても明るいキッチン&ダイニングがある。ここまでが増築部分で、その奥から古い建物となり、暖炉のあるリビングへとつながっている。2階には寝室やバスルームがある。

内装に使われている床材や建具について、ピアスさんは「unprecious way」という言葉で表現した。「unprecious」という単語をコーディネーターさんは、「素材」と訳してくれた。「低コストでつくりましたから」とピアスさんが言ったように、たしかにラグジュアリーな雰囲気はない。装飾的な化粧材の類も、ほとんど見当たらない。

しかしそうしたいい意味での“ラフさ”が、18世紀の狩猟小屋がもつ素材さと、うまい具合に調和しているように感じられた。

サンシャインとムーンシャイン

妻のスーさんはこの家での暮らしをこう語ってくれた。「家が暮らしのリズムをつくっているのかもしれませんが。これだけ陽が当たると、太陽の動きにあわせて生活を送らざるをえないですし、こんなに自然が近くにあったら、季節の移り変わりを繊細に感じとるようになりますからね。キッチンに立っていると、シカやキツツキが見えますし、夜になれば、フクロウの鳴き声が聞こえてきますよ」

この家は「ムーンシャイン・ハウス」と名づけられている。そのいわれをピアスさんに尋ねてみた。

「このあたりの土地のことを、昔から“ムーンシャイン”と呼んでいたようです。あと、夜になると月の光がよく届く場所だから、と聞いたこともあります」

火灯し頃、月が顔を出しはじめると、向かいの丘の頂は薄暗い空と同化しはじめる。スカイラインは深い、深い緑色になるのだ。

そしてその美しいスカイラインは、この一帯に暮らすみんなが共有している。

「心地いい」は空間だけを指す言葉ではないようだ。英国には、“線”にもそれがあった。

参考・引用文献 『英国の未来像』(出口保夫訳/東京書籍)、『グレン・マーカット：シンキング・ドローイング／ワーキング・ドローイング』(TOTO出版)、『イギリスの郊外住宅』(片岡篤/住まいの図書館出版局)、『ハウスの歴史・ホームの物語』(アンソニー・クワイニー/花屋後廣訳/住まいの図書館出版局)